

# 無言館のこと

## 正村 欣生



戦没画学生慰霊美術館「無言館」は、1997年5月、長野県上田市に開館した美術館です。上田市といってもピンとこない方も多いのではないのでしょうか。上田市は長野県の東側に位置する人口15万人ほどの地方都市です。「不惜身命・三途の川の渡し賃」の六文銭を旗印にした戦国武将・真田幸村の里として全国的には知られています。戦前から戦後にかけて、蚕糸（養蚕・蚕種・製糸）産業が盛んな地としても知られ、「蚕都」と呼ばれていたこともありました。美術史的側面では、山本鼎がこの上田の地から「農民美術運動」「自由画教育運動」をはじめ、

性を尊重し、それまで模写至上主義だった美術教育から、見たものを感じたままに描く自由画への転換をはかった画期的な運動だったといわれています。現在の美術教育の基礎となる運動でした。

そんな上田市の中心から千曲川を渡り南西に車で30分ほどの小高い丘の上に「無言館」があります。戦没画学生慰霊美術館の名のとおり、先の戦争で亡くなった画学生の作品を展示している美術館です。美術館といえは有名な画家や彫刻家の作品が並んでいる場所を想像される方は多いのではないのでしょうか。

しかし、「無言館」にそういった作品は一点も展示されていません。絵を勉強している途中、いわば『絵描きの卵』の作品が並んでいる美術館なのです。「無言館」に収蔵されている作品の半数以上には、作品を完成させた証であるサインが入っていません。これも、まだ手を加える予定だったものや、下図や練習のための作品だったということ物語っているのでしょうか。こちらの「市民の意見」にも表紙絵として当館収蔵作品を掲載していただいているので、皆さまのお目に触れる機会もあったと思いますが、ご覧いただいたとおり、彼らの絵はまだまだ未熟と言わざるを得ないものばかりです。この美術館に従事している者が言うのもおかしな話ですが、彼らの未熟な絵を見るために、開館以来130万人を超える方が東信濃の山の上の小さな美術館を訪ねてきてくださっているのです。

### 来館者の声

「無言館」に来館される多くのお客様が「生きていれば立派な画家になれたのに」「戦争はこの国の素晴らしい才能を奪ったのですね」といった感想を口にされます。また「私の叔父もフィリピンで亡くなりました。ここに並ぶ画学生は遺す物があつてうらやましい叔父は何も遺していかなかったから」と話していただく方もいらっしゃいました。彼らのあふれる才能や未来の可能性が失われたことは本当に残念なことです。まだまだ余りある伸び代を残しながら、戦争という理不尽な力により命を落とすことになった彼らの不遇を思うと、その先に待っていたはずの未来を思い描くのは当然のことでしょう。また、身内の方と同じような境遇の方がいらつしゃれば尚のことです。そして、来館者は二度と戦争は起こしてはいけなとの思いを強くし、出口の扉を押すのです。

しかし最近、「無言館」を訪れる方から聞こえてくる声が少しずつ変わってきている気がします。以前来館された美術大学の学生さんは「デッサンとか見ていると自分の予備校時代を思い出してツライ」と言いながら、「これから自分がどんな作品を制作していかうか館内で考えてました」と言っていました。また、「私たちと同じで、普通に幸せな家庭だったんですね。それが壊れてしまったことに怖さを感じます。家族をもっと大切にしたいと

「思います」と言い残されていった方もいらっ  
しゃいます。自分の現在や過去を思い、自分  
と向き合う時間を戦没画学生の作品に求める  
方が増えているということではないでしょう  
か。まるで「無言館」に並ぶ作品を親しい友  
人に見立て、悩み事を打ち明けているようで、  
何だか微笑ましく受付で話を聞かせていた  
だいています。

先ほど、来館者から聞こえてくる声が変化  
してきたと書きました。戦没者である画学生  
への感想から、画学生の生きた時間であら  
れた感想に変わってきているのだと思います。  
これまで「無言館」という美術館は、とかく  
反戦平和という言葉で括られ、語られること  
が多い美術館でした。私たちも反戦平和を否  
定しません。戦争さえなければ彼らは亡くな  
ることはなかった訳です。平和でなければ絵  
なんて描いていられないのです。しかし、戦  
没画学生は戦争という、絵なんて描いていら  
れない状況でも絵筆をとり続けました。彼ら  
にとり、絵を描くその時間は平和そのもの  
だったのではないのでしょうか。ある者は故郷  
の風景を描き、ある者は大切な家族を描き遺  
しました。

## 「絵繕い基金」募金のお願い

開館以来、「無言館」にご寄託いただいた  
作品は700余点を数えます。修復を必要と  
する作品もそれだけ増え続けているのが現実  
です。まもなく戦後70年という時を迎えます。



戦没画学生の作品の並ぶ「無言館」館内

時間の流れとともに作品の劣化も確実にすす  
んでいます。ご遺族の許から作品が届いた段  
階で、画学生のもう一つの生命<sup>いのち</sup>ともいべき  
作品が、修復しなければこの世から消えてし  
まうような状況です。また、美術館は展示公  
開という仕事と同じ分量で作品を残し後世に  
伝えるという仕事を担っています。これは根  
本的に矛盾するものです。展示公開すれば作  
品の劣化をすすめる、公開しなければ美術館と  
しての役割を果たせないからです。また一切  
の公的な助成を受けず、日々の入館料収入に  
よって運営されている「無言館」にとり、修

復費用を捻出することに限界があります。

そこで、このたび「無言館」では作品修復  
に特化した「絵繕い基金」を設ける運びとな  
りました。「無言館」の日々の活動では限界  
のある修復活動を、皆様にご協力を仰ぐこと  
により、緊急を要する作品を速やかに一点で  
も多く後世に残したいとの思いから始まった  
活動です。どうか皆様のご理解をいただけま  
したら幸いです。

(しようむら・よしお／一般財団法人 戦没画学生  
慰霊美術館無言館・事務局長、館主代理。写真は無  
言館提供)

### 「絵繕い基金」募金

■法人・会社 1口 5万円

■個人 1口 5千円

### お振込先

■銀行 八十二銀行塩田支店

普通預金 289492

口座名 一般財団法人戦没画学生慰霊美術

館無言館

■郵便局 00520-9-36114

口座名 一般財団法人戦没画学生慰霊美術

館無言館

※募金下さった方には「無言館」より領収書  
を発行致します。また募金者のご承諾を得た  
上で、修復された作品の額の裏(または保護箱)  
にお名前を記名させて頂きます。